都高時報

都大附高新聞部
東京都目黒区金町591
電話 荏原(78) 0749
編集責任者 安田洋二

活発な高校生の動き

―勤評闘争の諸問題―

勤評反対闘争は良くも忘れられてしまいそうであるが、決して九月十五日でビシャリと終ってしまったのではない。根強い闘争が組まれ、それは勤評が撤廃され、より民主的教育が実現するまで休みなく続けられるのである。すべてをひっくるめた民主主義擁護闘争の中で、私達高校生の民主的運動を促進していくために今迄の高校生の勤評闘争を振返ってみよう。

勤評闘争の以前に八月の第四回世界大会へ向って、国際的に大衆的に、原水爆禁止を求める声が高揚していたことを思い出そう。そして昨年来停滞と言われた原高連もそこに活路を見出して、核実験禁止、核武装反対をスローガンとして活動し、七月十二日には原水爆禁止の高校生集会が都大講堂で開かれ、世界大会へ向けて十五名の代表を送り、参加することを決定した。けれども原高連執行委員会のやり方に対しての風当りも強く、スローガンや、行動形態に対しての批判は絶えなかった。この十二日の大会には高知県から高知高校生徒会連合（生連）、定生連の各々の代表者二人が出席して、勤評闘争と高校生の全国組織を呼びかけた。当時の原高連では原高連をあくまでも原水爆問題に枠をはめて、政治的問題に触れるのは良くないという意見が支配的であった。

そして、ようやく発展して来た原高連で強硬に勤評を取上げようとすれば分裂してしまう恐れがあった。しかし、既にソ連は三月三十一日に実験を停止していたし、アメリカも夏の実験は止められないが、その一連の実験終了後は停止することをほのめかしていた。したがって、もし実験停止が実現できたら原高連を今後どのように発展させるかが大きな課題であったが、勤評はもちろん政治的問題は全てダメでそこに原高連を中心とした活動の決定的なせまさがあった。発展の方向に向いながら実際には行詰ってしまった。夏休みに入ると校内的な活動が困難になり、したがって個人的な行動のみに頼るようになった。しかも原高連をどのように発展させるかではなくて、別の組織を作って、数十人の積極的な人による勤評闘争を高校生の中に入れていこうとしたのである。それには急速に民主主義を守るための広い活動ができるような組織を作っていく必要があったし、高知や京都その他の各地での原水爆禁止運動や、勤評運動のもり上りを全国的に統一する機運がでてきたようなことからも東京のそういう組織は必要であった。しかし現実の状態として前にも指摘したように、どうして各校の生徒会で正式加盟によって政治的な問題を取上げる組織が結成されることは不可能に思われた。そこで原高連に結集した各校の代表者の間で、高校生徒会連合結成準備会がもたれ、世界大会前後に東京に集まってきた各地の代表者によって全国高校生徒会連合（全高連）結成準備会が開かれ、十月二十五日には最初の全国の高校生による統一行動が予定された。

そうした全国的な動きの中でやはり政治、経済、文化の中心である東京の高校生が立上る必要があったし、勤評闘争に具体的に参加するには少くとも個人的な組織ではあるにしても、積極的に行動を提起していく組織が要求され、八月二十八日に勤評反対行動委員会が結成されるに至った。

行動委の行動の矛盾

勤評反対行動委の成立がこのように行われた事によってその行動方針は当然一つの性格を出びてきた。即ち高校生の諸事情による一般的無関心さを超越して、行動委の独自の行動こそ行動を発展させる方向だとしたこと、したがって勤評について、あるいは全般的な反動政策についての研究会や、自由、民主主義擁護という思想的な変革が軽視され、あまりにも客観的な必要性（勤評の重要性にしたがって高校生が行動を提起することは、全体的な勤評闘争に有利に働くという事）を重視しすぎたことである。自治会生徒会単位で闘争する方針が行動（集会、デモ等）の準備のために個々的な若干の例外はあるにしても全体的にはできなかったのである。こうして当初の方針であった、行動委員会が生徒会を組織的に運動に参加させようということは、行動方針からして無理だったのである。

立上る高校生への弾圧

三日、六日、十三日の高校生の教育庁への抗議デモ、集会は確かに教育行政の中心である東京のド真中で高校生が勤評阻止の意志を世論に訴え、勤評実施者に打撃を与えた。

これらの具体的行動は教育庁、施政者に大きく響き、早速都内の各校長に連絡をして「厳重に善処」するよう通達した。法務省でも調査に動き出した事実があり、六日には不当にも四名を検束して警察と教育庁の連帯性が明らかにされた。このように高校生の運動を一挙にもみつぶそうとする勢力は校長を通じて訓示や、処分等の圧力となり、新宿では三名の処分者がでた。約六名の処分者がでるのではないかと予想された教育大付属駒場では全校的な処分反対の雰囲気と準備の中で、世論の注視を恐れた学校側はついに一人も処分者を出せなかった。

高校生がこの様につながりをもって、圧制に対して自分達の意見を主張したことは大きな意義がある。しかもこの勤評闘争が民主主義を守る高校生の運動の一歩前進となり、単に「人道的な立場」から原水爆実験反対を叫ぶ程度だったものが、はっきり政府の反民主的な政策に反対し闘ったことの意義は極めて大きい。にも拘わらず多くの高校生が全くそ知らぬ顔で受験勉強にいそしんでいるのはどこに欠陥があるのだろうか。前にも述べたように行動委の性格はいわゆる活動家といわれる人々の結集体ということであるが、この行動委が自分達だけが先んじて行動を起して、その行動に限定された人を動員するという態度が基本的な誤りとして挙げられる。問題は勤評を皆の問題として討論し深く理解することであり、そして、互いに現在の放らつな社会風潮に影響されている自分達の心の中に圧政と非民主主義に対する「抵抗」の精神をしっかりと植えつけ、広い組織での闘争を展開することなのである。そのためには行動委はより積極的に私達全生徒の中に入って意見を交換していく必要があると思う。

繰返すと徹底的な反動政策に抗していくためには、自由と民主主義擁護という思想的な統一のもとに広範に組織づけられる必要があるのだ。

主張　我々の自治を　我々の手の中に

記念祭はいよいよ今日から始まる。今年は準備も相当前から始められ非常にスムースに事が運んできた様だ。そして、自治は私達の手の中で守られている様にみえる。しかし私達の自治は現在私達のものだろうか。また私達は守る事に努力しているだろうか。

去る九月六日勤評反対を支持する高校生達が教育庁へ抗議文を持っていく途上で無届デモのため四名、検束された。その様子はその後校内でも説明されある程度皆に知られているが、高校生に事実上の逮捕が行われたのは前例のない事であり、また事が学校側からいいわたされた。この出来事を考えてみるとまず第一に、これらの問題について生徒側と学校側との間で何の話合いも行われていず、事実上、命令という形で表われているのである。その上、その後勤評に関する生徒大会を開こうとしたが議題が勤評であるとの理由で許可が与えられずわずか昼休みを利用しての集会しか開けなかった。都立の歴史を考えてみるとこの様に生徒の自治活動について学校側が一方的にある種の制約を与えたという事は今まで全くない事であった。生徒の自治ということで貫かれてきた都立の歴史がここで変化したのである。私達の伝統は自由と平和を守っていく態度にあったのではないだろうか。この歴史を考えるとこの事を当然であるかの様に考え忘れ去ってはならないのだ。第二に内容からみても肯定できない面がある。都立という学校自体を考えてみた場合今、外部と結びついた一部の者による先鋭的な運動が行われ注目され、ますます逆コースをたどりつつある社会状況の中でまっさきに外からの弾圧の中心となり学内の自由さえ乱される様になったりすることは好ましくないことだ。しかしこれらは民主主義、平和を守っていく為の種々の運動を多少なりとも抑えるものではないだろうか、又我々がそれに甘えてしまって、その制約内の温床でぬくぬくとしてまい何も行わなくなり、安易な自治を求める方向になったらどうだろうか。既に現在新宿高校では二生徒が勤評反対の行動に参加したとの理由で停学処分になった。

また教育大付属駒場高校では勤評反対に積極的態度を示している生徒が教師に呼びつけられたり家庭を回って説得を行ったりして運動をしないようにいわれている。その他多くの学校で生徒を呼びつけておどしたりすかしたり、あの手この手で高校生の行動を粉砕しようとしている。このように実際、運動を抑える手が遠慮会釈なくのばされているのだ。こういう周囲の状況の中で私達が都立という枠内にとじこもり、自治さえも満足に守っていけない状態におちいろうとしているのは全く危険だ。勤評問題でも教育庁から通達を出し個々の高校生を押えてまで文部省がこれを押し通そうとしている現在、私達はしっかり自治を握っていかなければならない。

こうみてくると気になるのは現在の自治委員会である。存在しているのか、いないのか。勤評問題など特に自治委員会が中心となって研究活動なり問題提起なりすべき問題であるのに何一つ行われなかった。そのため、有志による行動委員会の決成に至り、皆に問題が浸透していかなったのだ。私達の自治権が多少なりとも侵されようとしている時になんの反応も示せない状態なのだ。しかしせめられるのは私達個人々々である。自治委員会と共に私達も奮起して自治を守っていこう。記念祭に自治の火を燃えかがらそう。

アンアナ

近頃は改正ばやりである。警職法改正、安保条約改正、独禁法改正等々。はては憲法改正まで岸首相はアメリカで豪語している。戦後十三年もすると総てが古くなってきたとみえる。というよりはむしろ国会を牛耳る老人方には新しすぎるのかもしれない。▲警職法改正が成立すれば、総ての学生運動、労働運動そして婦人団体の運動まで制約され、コン棒はもっと敏速に平和を愛する人々の上に動く様になるだろう。▲安保条約改定が成立すればどうだろうか。徐々に核兵器が日本に入ってくる恐れは十分にある。未だに毎年何人かの人々が原爆による障害で死んでいく。その戦争の恐ろしい爪跡が消えぬうちから、核兵器が入りこみ、いつでも戦争ができる態勢を整える様になろうとしているのだ。▲再軍備を合法的にすることも、自民党政権下では不可能なことではあるまい。徴兵制だって……こう考えてくると私達の身のまわりをうごめき、支配している力がひしひしとせまってくるのが感ぜられる。「第二次世界大戦は聖戦じゃった」等と大言してはばからぬ人々がまだまだ頭をもたげてきている今日である。「人の噂も七五日……」ではないが、私達はそうすぐに昔を忘れる事はできない。それなのにたった戦後十余年で戦前と同じ事を繰返そうとする動きが総ての政策に表れてきているのだ。▲「記念祭の読み方は」と尋ねられて「キネンマツリです」としか答えられない様な状態になりたくないものだ。のんびりと「誰かがやるさ」と思っているうちに社会は刻々と変化し、とり返しのつかない事になったら後悔してもあとのマツリだ。記念祭の中で悪化しつつある社会状勢に強くむかっていくエネルギーをたくわえようではないか。

皆様に愛される
誠実な御店です
どうぞ御利用下さい
中華そば
軽飲食
朝日屋
目黒都立大学正門前

志るこ・御菓子
あんみつ・ソフトクリーム
ますや
本店 都立大駅前西口
支店 自由ケ丘銀座通り
TEL (78) 四六〇八

10月29～11月3日
汚れなき悪戯
4日～9日
めぐり逢い
10日～14日
ケイン号の反乱
15日～19日
帰らざる河
渋谷 東急名画座
TEL(40)7229

渋谷東宝 TEL (46)2268
10月28～11月2日
裸の大将
大江戸千両祭
3日～9日
恐喝
裸の大将
3日～9日
底ぬけ楽じゃないです
北海の男
10日～19日
戦争と貞操
河は呼んでいる
渋谷スカラ座 TEL (46)1929

校内に捨う記念祭

慣例だからやるのか？

記念祭を三、四日後に控えたある日、今年の記念祭はどんなものか記者は校内を歩いてみた。数人の人々に「昨年の記念祭から得たものは？」と問うと「別に何も」「都高生である事の自覚」「とに角楽しかった」等の答が得られた。「何のために記念祭があるのだと思いますか」という問には皆考え込んでしまった。だが、「慣例だから」「皆が何かをやりたいと思っているから」等の答しか得られなかった。次に「今年の記念祭に臨む態度は？」の問には「思いっきり馬鹿騒ぎがしたい。今はそれさえも出来ない状態ではないか。」「一生懸命協力したい」「皆と一緒に仕事をするのは非常に気持がよい。だからできる限り皆とやりたい」等々の答が得られた。

これらにも現れているように殆んどの人々が「とにかく何もかも忘れて瞬時を楽しみたい」という考えをもっているのが偽わらぬ心情らしい。先日新聞部と執行委員会主催で記念祭に関する座談会を開いた。クラスの仕事等の為集まった人は十人程の少数であったが、ここでも「記念祭の目的は何であろうか」という事が問題となった。友情、団結それ以外の何物もないのだろうか。個人々々がバラバラになり八時半にきて二時半に帰っていくだけの学校生活においてはそれさえも満足に望めないのだから、それ以上の物を望まなくてもよいといった考えが大半を占めていた。又、それ以上のものとは何だろうか。つきつめていくと皆混とんとしてわからなくなってしまうのだ。特に近頃は記念祭にまるっきり無関心或はほんの協力といった形しかとらない人がでてきている。「とに角釘一本でも一人々々が打ってほしい」と執行委員長松本君もいう様に現在では皆の協力という事すら完全に望めなくなっているのだ。

しかしとに角校内は騒然としている。今年は執行委員会は比較的早くから活動を開始していたが、クラスの装置、練習等は極く期日が迫ってからあわただしく始められた。九時、十時まで残って不自由な明りの許で準備は続けられているが、どこか何かが抜けている様な寂しい気持がするのだ。」

年々変りつつある都立

去年は〝記念祭という名のオマツリ〟という言葉が流行った。都立の伝統といい、自由な精神といい総て考えなおす時期が来ているのだ。時代の流れにあってとかく昔を懐れ、嘆くのはつまらないことだ。現在あるものは現在の見地で処理されねばならない。記念祭は友情をつちかい、豊かな心を養うために共通の場となっている。「別に前々から意義など強いて求める必要などない。やっていくうちに色々と考え出されるのではないか」という意見もきかれる。最近、現実は急速に回転しているのだが身をもって体験する程の圧迫もない。ある程度の民主々義は獲得されている。昔の圧迫された中で行われた様な記念祭と同じではない。「ファイアーは現在のわれわれにそぐわないものを持っているから廃した方が良いのではないか。」という意見もでてきている。ファイアー無用論は今年に始まったことではないが、ファイアーが持つ性格は年々変化してきている。今年の記念祭歌をみても少しも昔と同じものは感ぜられない。平和の落着きと淡々とした理性のひらめきが感じられる。けれども真の平和か、落着きか色々疑問がでてくる。新しく生れてきた濁ったもののはけ口としてもファイアーはまだ必要である様だ。健全な自己形成のためにもまだ〝火の残骸〟とはきめつけられない何かがある。けれども去年の墓標事件に表われた様なはき違えた自由、特権意識が存在しているのは反省せねばならない。今年は新制十周年で学校側は二十三日に式典をもった。「十周年をどう思うか」ときかれても「時の流れ」位にしか答えられない状態ではないだろうか。今こそ都立の歴史と現実を直視し、考えねばならなくなった。

警職法の裏

現在警職法に対して大規模な反対運動が展開されている。そしてそれは何故だろうか。A級戦犯を首長とし、戦争の犠牲である孤児達を就職からしめ出し、堂々と汚職やつまみ喰いをする岸政府と資本家達は、厚顔にも「暴力団、非行少年の増加は教育の欠陥であり、彼らの性質の愚さである」と言明し、警官に守らせた節評や道徳教育を実施している。真実を伝えるべきマスコミさえも、戦争中「天皇」の為と称して無責で青年達を働かせ、国民の血と汗によって膨張した独占資本に握られ、真実の報道を制約されているが、われわれをあれほどまでに恥知らずにだまし、世界の人々にさも迷惑をかけた戦争を起した政府が、真に国民に忠実であり得るだろうか。成程、今なお右翼は「聖戦」だとわめいている。けれども、科学的に物事をみつめねばならぬ私達が「真実はわからぬのだ」のみいって逃避することができるだろうか。そして現在米国は安保条約改定に熱心である。実際、安保条約がどれ程不平等であるかはすべての国民が認めている。がこの改定とて台湾問題をめぐる米国の孤立化や鍋底景気にあえぐ資本家達の為の改正でしかないのだ。例えばその一つに「現行条約の片務性を改め、米国の日本防衛の義務を明記する」とある。すなわち日本と米国とを切っても切れぬ絆で結びつけ原子戦争体制の中で、日本に積極的な役割を果させ核武装に、より一歩踏み出させようとしているのだ。そしてまさにこの時期に警職法が出されたのは単に偶然であろうか。一見したところ今度の改定はいずれも妥当にみえる。が、きわめてあいまいな表現はどうにでも解釈できる。即ち、あらゆる場合に警官の判断によって集会や演説会場を解散させ、印刷物をとり上げ検束されることが許されてくる。賃金値上要求の労働者は確かに政府にとって善良な市民ではないのだろう。これだけではない。現在は警職法によって代表されている一連の動き―ファシズム―によって我々が渇望している真実に怒りを表明しているのは、特高警察を体験した父母であり、先輩である。公私にかかわらず、すべてに関する国家の干渉と統制――これこそ、一方的な思想を押しつけられる事でなくて何だろう。国会では暴力沙汰が起った。政府は野党が国会の審議権を無視したという。が、この改憲案を極秘裏に準備し世論に検査させず、突然、国会に出した政府はより悪質であり、これに反対する事は審議以前の問題でなかろうか。そしてその背後に安保条約の件も控えている。警職法に目を向けてのみいられない。綿密周到な陰謀の準備がなされている時、無関心である事は罪悪であり許されぬことである。

真実に怒りを表明している人々に如実に告げているのだから、

「平和と民主主義を守る会」発足

去る十八日「平和と民主主義を守る会」が結成された。この会は平和と民主主義という目的に向って手をつなぎ運動を進めていこうとする有志の人達によって結成されたもので、発起人は数人のグループで、現在は十余名程である。平和と民主主義は全ての人の願いである。けれども現在世界でも日本でも決して真の平和の中で民主主義が実現されてはいない。世界にはいつも内在する戦争の危機があるつい最近には台湾で実際戦闘が行われた。核実験停止も気運はでてきたがまだ実現されてはいない。日本ではどうかと言えば勤評、そして今度の警職法等の民主的な教育や運動を破壊しようとする動きが最近特に強まっている。再び人々が圧迫される事のない様に、戦争を繰返さない様に、こうした問題についての無知をなくして、一歩すすんで積極的に問題にたちむかっていくという態度をこの会は示している。沈滞している自治委員会、いささかマンネリにおちいった行動委員会等の間からこの様な意味をもった会が生れてきたのは非常に嬉しい事である。

（なおこの会についての詳細は新聞部に問合せの事）

部告

この二面となった五五号は新聞部の悪戦苦闘の結晶です。夏休みが終り、勤評闘争が激化した時、新聞発行へとのりだしましたが、ぐずぐずしているうちに試験となり、はかなくもお流れ。何もしていない事がこれほど心細く、やりきれなく感じられた事はありませんでした。このような活動の中でいよいよ記念祭をむかえました。今度こそとはりきりましたが、実際働けるのはたった三人。そのうえ体育館は全然電気がつかないし時間は迫るしでローソクの燈の下で記事を書いたりしました。とにかく「出せた」という事が私達部員には大きな喜びです。今号より編集長は安田洋二にかわりました。

父兄投稿

勤評に対する高校生の行動に思う

二年在学中の私の娘が、いつも「私の学校は何でも黙って見ていて下さるので、皆が感謝している」といっているが、これは、私達父兄としても、同じ様に嬉しく思っているところである。

生徒達が、夜遅くまで勤務評定反対デモ参加の準備をした事に対しても、学校当局から何の干渉もなかったそうである。唯、実際にデモに参加したものかどうかの点になると、何となく気にかかる節があるとみえて、その決行について相談を受けた。奨励すべき事ではないにしても悪い事とは考へられないから同意を与えた。

併し当日になってみると、デモ参加者のうち四人が、不幸にも不当検束されるという事態が起った。こうなると先生方も警察署まで出向いて下さる他なくなり、私も夜娘の電話連絡で京橋署へ行った。警察署の情景は決して楽しいものではなく、殊に、警官の実力行使の場面となると、悲惨ともいうべく、甚だ不快であった。高校生は、まだ、こんな実際運動をしない方が望ましいのだ。デモも参加決定に先だって、父兄の同意を求めたのは、それが常態ではないことが、当人にも何となく感じられるからでもあろう。

併し、祖国の急を救うために、少年も戦場に立たせられ、若い学徒も狩出されるのだから、高校生以上の生徒や学生が、重大な社会問題についてのデモを行いたからといってそれを非難する理由はないと思う。唯出来るなら彼等にその様な実際運動から遠ざかって、勉学に専念してもらいたい。その為には、社会と父兄の側で、彼等が学業だけに励むことが出来る様な環境をつくってやる責任がある筈である。（筆者は小山尚子氏）

映評

この映画は劇作家アーサー・ミラーの戯曲「るつぼ」をフランスのサルトルがシナリオ化したものであって、貧しいが仲間から尊敬されているジョン・プロクトルを独占したいと思う少女アビゲイルと、自分達の権力を強化しようと図る施政者達によって行われた魔女狩りと、それにたち向う民衆の姿が描かれている。支配権の安全と強化の為に自からの手で起した矛盾も、何もかも魔女のしわざとして民衆に恐怖を叩き込み完全に民衆を手中に握ろうとする牧師や、総督達。民衆の抵抗の代表であるジョン。その対立はこの儘現代の支配者と民衆との対立である。「金持に魔女はいませんよ。」と半ばあきらめの調子でいわれる言葉にも、この事が表われている。この魔女狩りの裁判に於ては事実があってもなくても密告するか、魔女の為に乱心して精神の正常さを失ったと告白すれば罪はまぬがれる。さもなければ死刑だから無知な民衆は恐怖の為に告白し、総督の思う壺にはまっていく。この告白により恐怖の目は真直に魔女にむけられその陰にある物にむけられない。しかしジョンは妻の愛に力を得て死刑執行人の態度を正当化しない様に偽わりの告白をせず、民衆が必ず立上る事を信じながら敢然と絞首台に上っていった。私達はこれとよく似た事が現代に於ても行われている事に気づく。松川事件がそれだ。事実を伴わない自白によって罪せられようとしている人々。現代の魔女は誰だろうか。映画から現実から、真実を守る事のむづかしさ、尊さが感ぜられる。

古書の御用は
小川書店
都立大学西口通り

中華料理
丸仙
都立大学八雲通り
電話(78)三三三五

古書高価買入
良書、珍本あり
都立書房
柿の木坂途中

新装開店
文苑堂
紙・文房具・事務用品
衾町89　都立大学坂通

御菓子司
福好
都立大学駅前
TEL(78)四六四九
分店　氷川神社前八雲通り

勉学の友・知識の泉
新刊図書・雑誌
都立大学駅前
TEL(78)2339
八雲堂書店

都立大学門前
衛生完備
更科本店
TEL (78) 3047